

月の花挽歌 ～5.裸のマハ～

5-8

銀座の高級クラブは、席料だけで一人平均二万五千円かかる。顧客には一流企業のトップから各業界の著名人などが多い。

利用者の動向は敏感に景気を察知して、日本経済の現状を映す鏡でもあった。

ホステスの中から選ばれた者だけが、雇われママではなく独立して経営者となるが、リーマンショック以降、千五百軒程に半減したクラブの中で、本人の資金で経営しているオーナーママは百五十人にも満たない。

オープン二ヶ月足らずで閉店するケースもざらにある。どんな有名店であれ、少しの油断が閉店に繋がるシビアな世界だ。

百五十人のうちの一人の真紀にしても、毎年、年賀状を五千枚ほど書くシバレンタインデーには同数のチョコレートを送っている。

異性との程よい距離感を保つセンスに長けていた真紀が横田に血道を上げたのは、それ相応の男だったからで、醜聞が立った時、真紀はこれで店も終わりだと覚悟した。

ところが、皮肉なことに日本画界における横田一村の画業の評判の高さはもとより、その破天荒な生き様が、勝ち組の男たちにとって、憧憬と嫉妬と侮蔑がないまぜになって、いわく言い難い極上の好奇心をそそり、何年かぶりのお客まで来店するようになった。

産まず女と噂された真紀にも、妊娠中絶の経験がある。

ホステスのアルバイトをしながら大学卒業間際の相手は大手水産会社の営業部長で、望まれない妊娠であった。

手術後の経過が思わしくなく、産めない体になった。

銀座の水が合っていたのか、住み着くよりほかなかったのか、立ち直ってから五年後の二十八歳の時に、自己資金でお店を持つことができた。これは希有な事例と言えた。

ナンバーワンになれたホストは、何をやっても成功すると見なされるように、ホステスも然りである。

当たり前のことだが、高級クラブの店格は客層で決まる。

クラブ『こはる』には、一日平均八十人近い客が来店する。居心地の良さは勿論のことだが、えもいわれぬ真紀の男心を魅惑する力やオーラに客が客を呼んだ。

ホステス達にノルマを課さない方針も好結果に結びついた。

男女関係を迫られる事もあったが、真紀は本能的に自然体でかわす術を心得ていた。

それでも体が乾いて悲鳴をあげているときは、縁さえあれば抱かれない男に抱かれた。